

# 当院における *Haemophilus influenzae* type b による 化膿性関節炎の検討

加倉 寛也<sup>1),2)</sup> 太田 栄治<sup>1),2)</sup> 森井真理子<sup>1),2)</sup>  
宮本 辰樹<sup>1),2)</sup> 廣瀬 伸一<sup>1),2)</sup>

<sup>1)</sup> 福岡大学病院総合周産期母子医療センター 新生児部門

<sup>2)</sup> 福岡大学医学部 小児科

**要旨：***Haemophilus influenzae* type b (Hib) 化膿性関節炎は、侵襲性 Hib 感染症の 7.6% を占める疾患である。Hib vaccine 普及以前は Hib が 2 歳未満の化膿性関節炎の主要な起炎菌であった。

今回、2000 年 1 月から 2016 年 12 月までに当院で経験した化膿性関節炎のうち、Hib による 5 症例について後方視的な検討を行った。結果、5 症例すべてが 2007 年までの発症であった。発症年齢は生後 6 か月から 1 歳 10 か月で全例が 2 歳未満であり、罹患関節は股関節が 3 例、膝関節が 2 例であった。関節液培養陽性例は 5 例中 3 例 (60%) で、血液培養陽性例が 4 例中 3 例 (75%) であり、ペニシリン耐性株が 60% を占めた。また、中耳炎や髄膜炎の併発はなく、髄膜炎は 1 例 (20%) で併発していた。

当院の検討では、薬剤耐性の Hib が過半数を占めていたが、Hib vaccine が接種可能となった 2008 年以降に Hib 化膿性関節炎はみられなかった。この結果は、vaccine の効果を反映している可能性がある。

キーワード：アクトヒブ<sup>®</sup>、定期予防接種、細菌性髄膜炎、後遺症